こんなんしてます。

わだいのしごと

97

内モンゴル資源バンク

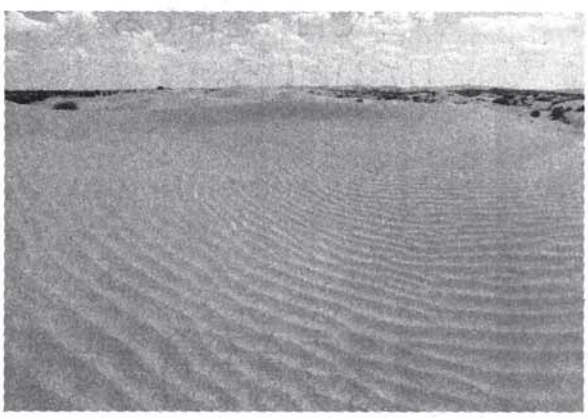
砂漠緑化

中国内蒙古自治区の西南部、オルドス市は砂漠と高原の市。北に大きく歪曲する黄河に囲まれたところです。8月下旬からこの地の毛烏素（モウソ）沙地での調査に参加しました。

土地を劣化させ不毛の土地へと変貌させる砂漠化は、地球上で年々深刻になっています。砂漠化の大きな原因は、人口増加による食料増産、高収益を目的とした過剰な放牧、過剰な開墾、過剰な耕作、過剰な灌漑、過剰な伐採など。人間の行いがわれわれにはね返ってきているのです。

砂漠化を防止する砂漠緑化は、植物が厳しい砂漠環境の中で生き抜くために培ってきた、希少な水の動き、土壌の性質、植物生理などがあいまった生態系の微妙なバランスを知り、それを生かす方法での緑化でなければ成功せず、それゆえ、地道かつ緻密な調査研究が必要になっています。

調査中に、砂漠化防止活動で世界からも関心を集めている企業、China ELION Resource Groupの研究所、ELION資源砂漠研究院を訪問しました。案内してくださったのは、元内蒙古農業大学の副学長で、内蒙古自治区科学技術協会主席の王林和先生で、ELION研究院では統括する立場にもおられます。



クブチ砂漠

自然保護と経済

研究所の目の前には黄砂発生源の一つとされる広大なクブチ砂漠が広がっていました。王先生がプロデュースされたクブチ遺伝資源庫は中国西北部砂漠地帯の灌木や希少な絶滅危惧種など1040種もの遺伝資源を収集・保存する植物資源バンクで、展示パネルには資源庫の段階的な目的が示されていました。

まず、砂漠の薬用植物、灌木、絶滅危惧種、草本植物などの保全、培養段階。次に砂漠の回復を目的としたこれら植物の植栽基地建設。次に砂漠植物を生かした薬、化粧品、飲料、酒、健康食品、油、飼料、肥料、土壌改良剤などの開発や砂漠緑化、砂の固定化など生態修復への応用段階。最終的には国の内外への技術ノウハウの広がりとし、次のメッセージも記されていました。

「何千年もの間、異なる生態条件の元で発展してきた絶滅危惧種は、人間の生存と再生のための材料の基礎を築くものとなる。貴重な富は破壊されたら永遠に消える」（以上原文は中国語、英語）。

このメッセージが情緒的な主張に終わらないのは、ここには自然保護、資源利用、経済をつなげるストーリーがあり、そのベースに生物学的な知識の集積がおかれていることです。研究所には優秀な研究者が集まり、着地点を見据えた研究活動が実践されていました。

資源庫の前庭で遊ぶ子ども。新しい町の住人か…

決して目先の利益や薄っぺらい貢献に惑わされるのではなく、砂漠緑化と砂漠資源の産業化、これによる貧困からの脱却など、永続的な社会貢献モデルの基盤として研究があり、それが研究の研究たる意義だと気付かされました。

なお、クブチ砂漠の傍には、砂漠化防止のために放牧を禁止された牧民を1カ所に居住させるためのマンションが建ち並ぶ新しい町が政策として形成されており、言葉は適切でないかもしれませんが、砂上の楼閣の印象を持ちました。

環境と生業がつながっていた伝統を捨てざるを得なかったのもまた、人間の所業の結果です。環境と経済と生存、生きる楽しさや多様さというものが共存するための道は、人類にとってまだまだ発展途上なのかもしれません。

プロフィル

湯崎真梨子（ゆざき　まりこ）
和歌山大学産学連携・研究支援センター　教授
専門は、農村社会学、地域再生学。自らが研究するだけでなく、地域と大学が共に成長するプロジェクト研究をコーディネートしている。